



日本人学習者の英作文における確信度副詞使用実態 ：アジアの EFL 圏 6 地域の比較

飯島，真之

(Citation)

統計数理研究所共同研究リポート, 465:34-54

(Issue Date)

2023-03-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100479383>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100479383>



日本人学習者の英作文における確信度副詞使用実態

—アジアの EFL 圏 6 地域の比較—

飯島 真之(神戸大学院生)

christmasayuki98@gmail.com

Adverbs of Certainty Used by Japanese Learners in English Essays —A Comparison between Learners from Six EFL Regions in Asia— IIJIMA, Masayuki (Kobe University, Graduate Student)

概要

本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパスである INCALE (The International Corpus Network of Asian Learners of English) の英作文モジュールである Written Essays (V 2.4) を使用し、アジアの EFL 圏 6 地域(日本・中国・韓国・台湾・タイ・インドネシア)の学習者における確信度副詞(adverbs of certainty: ADC) (例: *certainly*, *obviously*, *probably*, *maybe* 等)の使用実態調査を通じ、日本人学習者の ADC 使用特性を国際比較によって明らかにすることを目指す。なお、ADC 群は事前に、強意型 ADC (例: *certainly*, *obviously* 等)と緩和型 ADC (例: *probably*, *maybe* 等)の 2 群に分類する。調査の結果、日本人学習者には(1)ADC 全体使用量が母語話者より有意に少なく、その傾向は日本人だけに限定されないこと、(2)習熟度の上昇に伴い ADC 全体使用量に変化が見られず、同様にその傾向は他の EFL 圏地域にも見られること、(3)過少使用語が多い中で *surely* を突出して過剰使用し、他地域の学習者とは異なる傾向を示すこと、(4)全体的な使用傾向として、強意型 ADC に関しては *surely* を含む直接的で主観的な確信度を示す副詞を偏って使用する一方で、緩和型 ADC に関しては、他の 5 地域の学習者ほど *maybe* を含む書き手の立場が不安定で曖昧な副詞を多用しない傾向があること等が示された。

キーワード

コーパス, 確信度副詞(ADC), 日本人学習者, アジア圏 EFL 学習者

1. はじめに

言語使用において、話者や書き手が命題内容中に自らの感情、態度、価値判断等を表出することをスタンス表出と言い、特に英語におけるスタンスは、文法や語彙の選択に加え、声量やピッチ、ジェスチャー等様々な手段によって表出可能であるが(Biber, et al., 1999, p.966)、本研究では副詞におけるスタンス表出の実態を解明するという観点から、特に確信度の度合いに関わる副詞(例: *certainly*, *obviously*, *probably*, *maybe*, *perhaps* 等)に着目する。これらの副詞群は先行研究において、adverbs of certainty (Simon-Vandenberg & Aijmer, 2007 他), modal

adverbs (Huddleston & Pullum, 2002 他), stance adverbials (Biber et al., 1999 他)といったカテゴリーに分類され論じられてきたが、本研究ではこれらを確信度副詞 (adverbs of certainty: ADC) と呼ぶ。

飯島 (in press) では、母語話者の ADC 使用実態を明らかにするという観点から、ウェブ上の 33 種のレジスター別テキスト資料を収集した Corpus of Online Registers of English (CORE) を分析し、強意型 ADC として 31 語 (certainly, obviously, clearly), 緩和型 ADC として 14 語 (probably, maybe, perhaps), 計 45 語の ADC の頻度調査を実施した。その結果、高頻度で場面的汎用性の高い重要 ADC が抽出され、あわせて個々の ADC の言語特性が明らかにされた。これにより、母語話者の ADC 使用の全体像が明らかになった。

しかしながら、こうした ADC を学習者がどのように使用しているのかという点についてはいまだ未解明のままとなっている。そこで本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパス ICNALE の作文データ (Written Essays V 2.4) を使用し、アジアの EFL 圏 6 地域 (日本・中国・韓国・台湾・タイ・インドネシア) の学習者の英作文における ADC 使用実態を分析・記述することを通じ、特に日本人学習者の ADC 使用実態が対象 6 地域の学習者間でどのような特徴を持つかを、計量的観点を踏まえて考察する。

2. 先行研究

以下、L2 英語学習者の ADC 使用を対象とする主な先行研究を概観する。なお、関連する ADC は多数に上るが、本研究では、飯島 (in press) で定義した下記の 45 語を調査対象語とし、それに伴い、本節では下表に含まれる ADC に関連する内容に限定して先行研究を整理する。

表 1
本研究が調査対象とする ADC 群

分類枠	語数	ADC 群
強意型 ADC	31	absolutely, admittedly, assuredly, avowedly, certainly, clearly, decidedly, doubtless, evidently, definitely, incontestably, incontrovertibly, indeed, indisputably, indubitably, ineluctably, inescapably, inevitably, manifestly, naturally, necessarily, obviously, patently, plainly, surely, truly, unarguably, unavoidably, undeniably, undoubtedly, unquestionably
緩和型 ADC	14	allegedly, arguably, apparently, conceivably, maybe, perhaps, possibly, presumably, probably, purportedly, reportedly, reputedly, seemingly, supposedly

以下、上記の ADC に関する先行研究の内容を整理する。ADC 研究の多くが、それぞれ別個のデータを用い、分析を行っている。以下、表 2 は各先行研究の (1) 対象学習者、(2) 使用データ、(3) 対象副詞 (本研究が対象としないものは括弧内に記入) を整理したものであり、表 3 は各先行研究の言及内容を、表 2 で言及した順に整理したものである。

表 2

各研究の対象学習者, 使用コーパス, 対象副詞

出典	学習者	コーパス	対象副詞
藤本(2017)	日本人	• The Longman Learners' Corpus (LLC)に含まれる日本人データ(米・英の目標言語別) • American English 2006 (AmE06)と British English 2006 (BE06)	probably, maybe, perhaps, (of course)
Pérez-Paredes & Bueno-Alastuey (2019)	中国・スペイン・ドイツ人	• Louvain International Database of Spoken English Interlanguage (LINDSEI) • Louvain Corpus of Native English Conversation (LOCNEC)	obviously, (really), (actually)
Tenuta, Oliveira & Orfanó(2015)	ブラジル人	• Corpus of Brazilians Learners of English (CABrI) • Louvain Corpus of Native English Essays (LOCNESS)	likely, certainly, probably, perhaps 等
Sabzevar, Haghverdi & Biriya (2019)	イラン人	• 大学生から収集したエッセイのデータ • British Academic Written English (BAWE)	スタンス副詞 definitely, certainly, indeed, perhaps, probably 等
Bao (2022)	中国人	• 米中の石油工学分野における博士論文の要旨のデータ	スタンス副詞 例: perhaps, likely, clearly, obviously 等

表 3

各先行研究の言及内容

出典	言及内容	
藤本(2017)	probably	• アメリカ英語に対して日本人は少用。 • イギリス英語に対して頻度に有意差なし。
	maybe	• アメリカ英語では使用例がなく, 日本人は多用。 • イギリス英語に対して日本人は多用。
	perhaps	• アメリカ英語に対して日本人は少用。 • イギリス英語に対して日本人は少用。
Pérez-Paredes & Bueno-Alastuey (2019)	obviously	• 中国・スペイン・ドイツのどの学習者も母語話者より低頻度で稀。 • 意味項目において学習者と母語話者は共に証拠的意味合い(evidential meaning)で多用。 • 母語話者は句(phrasal)で多用。 • 中国人とスペイン人は節頭(clausal initial)で多用。 • ドイツ人は節頭と節末(clausal final)でほぼ同使用量。
Tenuta, Oliveira & Orfanó(2015)	• 母語話者はブラジル人以上に副詞を多用。 • 母語話者は(almost) certainly, certainly (not), (would) probably などの形式で ADC を利用するが, ブラジル人学習者は(will) probably など共起パターンが母語話者以上に限定的。	
Sabzevar, Haghverdi & Biriya (2019)	母語話者とイラン人学習者が多用する副詞に差が見られ, 学習者は母語話者以上に(of course), definitely, certainly 等の confident adverbs を多用。	
Bao (2022)	• スタンス副詞全体使用量は中国人とアメリカ人の間で有意な差はなし。 • 中国人は obviously 等のブースター(booster)を多用する傾向。	

これらの研究はコーパスを使用し、計量的な観点を踏まえつつ対象地域の学習者の ADC 使用実態をとらえている点において大変興味深い。しかしながら、これらの研究には(1)対象副詞の範囲が狭いものも含まれる、(2)対象学習者の習熟度が不明瞭なものも含まれる、(3)日本人を含むアジア圏の英語学習者を対象にした研究が少ないといった課題が存在する。

以上を踏まえ本研究では、(1')対象副詞の範囲を拡大し、(2')学習者の習熟度区分が客観的に明らかであるコーパスを使用し、(3')日本人学習者を中心とするアジアの EFL 圏学習者を対象とした研究を実施する。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

本研究は、日本人学習者の英作文における ADC 使用実態を、日本を含むアジア圏 6 地域の学習者の ADC 使用実態と比較しつつ明らかにするという目的の下、以下の研究設問(RQ)を検討する。

RQ1 地域別学習者の ADC 全体使用量はどのように変化するか。

RQ2 地域別学習者を習熟度別に見た場合、ADC 全体使用量はどのように変化するか。

RQ3 地域別学習者の特徴的 ADC はどのように変化するか。

RQ4 地域別学習者と個別 ADC はどのような相互関係性を示すか。

以上の 4 つの RQ に基づき調査を実施する。本研究を通じて得られた知見は、最終的には教材開発や指導法考案を含む、英語教育への応用のための指針とする。

3.2 データ

3.2.1 使用するコーパス

本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパスの ICNALE (The International Corpus Network of Asian Learners of English)を使用する。ICNALE は神戸大学の石川慎一郎氏によって開発された、アジア圏英語学習者(中国・香港・インドネシア・日本・韓国・パキスタン・フィリピン・シンガポール・マレーシア・台湾・タイ)の作文と発話(モノログとダイアログ別)のデータを集めた学習者コーパスである。ICNALE の大きな特徴として、(1)分析の信頼性を担保するデータサイズ、(2)アジア圏英語学習者のデータの収集、(3)比較用の英語母語話者データの収集、(4)収集条件の統制(例:トピックの統制や辞書使用の禁止)、(5)学習者属性のデータの収集(例:性別・年齢・専攻・学習動機・学習背景・習熟度)、(6)データの無償公開、(7)発話におけるマルチモーダルデータ(例:音声データやビデオデータ)の収集といった点が挙げられる(石川, 2021, pp.224-225)。特に(4)及び(5)に関して、作文及び発話内容のトピックを、「大学生にとってのアルバイトの重要性」と「レストランにおける禁煙の是非」の 2 種に統一し、加えて学習者の習熟度を、TOEIC 及びその他語彙テストの結果により、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)に基づ

く 4 つの習熟度段階 (A2, B1_1, B1_2, B2+) に区分している (石川, 2021, p.225)。

本研究では, そのうち英作文のデータである Written Essays (V 2.4) に含まれる, アジアの EFL 圏 6 地域のデータ (日本・中国・韓国・台湾・タイ・インドネシア) をダウンロードして使用する。当該モジュールに含まれるデータは, 収集過程において, 学習者に対し 20 分から 40 分で 200 語から 300 語の作文を, 辞書使用を認めずに実施させることで収集したものである (石川, 2021, p.225)。各学習者は 2 つのトピックそれぞれに関する 2 種のエッセイを書いており, 本研究では 2 種のデータを両方とも使用する。

下の表は, Written Essays (V 2.4) において本研究が調査対象とする地域別・習熟度別学習者のデータ規模 (総語数) を整理したものである。各データの総語数は AntConc (3.5.9) の Word List 機能を使用して調査したものである。なお, 本研究では地域間の頻度比較を行う際, 学習者の習熟度を B1 (B1_1 と B1_2 を統合したデータ) に限定して調査を行う。

表 4
ICNALE Written Essays (V 2.4) のデータ規模 (対象 6 地域と母語話者)

	A2	B1_1	B1_2	B2+	合計
日本	68529	79591	22390	8532	179042
中国	33720	110293	52031	6561	202605
韓国	33167	26910	40075	36194	136346
台湾	12878	40008	28484	11014	92384
タイ	53506	80758	45840	1016	181120
インドネシア	14754	37465	39517	1541	93277
英語母語話者					90613

本研究は, 以上のデータを使用し, 日本人学習者を中心とした EFL 各 6 地域の学習者における ADC 使用実態を, 計量的観点を含めて調査を実施する。なお, 頻度調査には, コンコーダンスである AntConc (3.5.9) をダウンロードして使用する。

3.2.2 データ中に含まれる ADC

本研究では 45 語の ADC (強意型 ADC31 語, 緩和型 ADC14 語) を調査対象とするわけだが, 今回使用する ICNALE Written Essays (V 2.4) のデータ中にそれらすべてが使用されているわけではない。実際, 今回使用するデータ中に使用例が 1 件以上見られた副詞は上記 45 語のうち, 以下の表における強意型 ADC18 語と緩和型 ADC8 語の計 26 語であった。

表 5
使用データ中に 1 件以上使用例が見られる ADC

分類枠	語数	当該 ADC 群
強意型 ADC	18	absolutely, admittedly, assuredly, certainly, clearly, decidedly, definitely, indeed, inevitably, naturally, necessarily, obviously, plainly, surely, truly, unavoidably, undeniably, undoubtedly
緩和型 ADC	8	apparently, maybe, perhaps, possibly, presumably, probably, seemingly, supposedly

特に、RQ1 及び RQ2 では、ADC 全体使用量を調査するが、実際そのデータ中には、対象語 45 語のうち上記 26 語の頻度情報が含まれていることになる。

3.3 手法

まず、RQ1 に関して、対象 6 地域(日本・中国・韓国・台湾・タイ・インドネシア)の学習者(B1_1 と B1_2 を統合したデータ)及び母語話者のデータ中における、ADC 全体使用量を調査する。本研究では、一定の習熟度に達している B1 レベルの学習者を、各地域を代表する学習者とみなす。なお、調査結果を提示する際、相互比較が可能なよう、粗頻度を各データの総語数(token)に対する 1 万語あたりの頻度に調整する。これらに加え、地域別学習者(計 6 群)及び母語話者の計 7 群の各群における、「ADC 全体使用量」と「データの総語数－ADC 全体使用量」(ADC を除く使用量)の粗頻度表に対して、カイ二乗検定を実施し、さらに多重比較として各 2 群間において Fisher の正確検定を実施し、差の有意性を検証する($\alpha=5\%$)。多重比較の際は Bonferroni 法に基づき、 p 値を調整する。なお、本研究における、カイ二乗検定、及び多重比較(Fisher の正確検定)の結果は、ブラウザ上で使用可能な統計ソフトである「js-STAR XR+release 1.5.3 j」の出力結果、及びそれによって生成した R プログラムを、フリーソフトウェア「R version 4.2.2」で実行することによって出力させた結果に基づいている(RQ2 も同様)。

次に、RQ2 では、アジア圏各地域の学習者に関して、習熟度別(A2, B1_1, B1_2, B2+)に ADC 全体使用量を調査する。RQ1、及び以下に続く RQ3・4 では、B1_1 と B1_2 のデータを統合した上で調査を行うが、RQ2 では、習熟度間の ADC 全体使用量の変化を詳細に調査するため、B1_1 と B1_2 を区別して頻度調査を実施する。上述のように、相互比較が可能なよう、粗頻度を各データの総語数に対する 1 万語あたりの頻度に調整する。データ中には 1 万語を下回るデータ(例:タイの B2+やインドネシアの B2+)も含まれており、1 万語あたりに拡大した頻度を結果として提示することを不適切とする場合もあるが、今回は RQ1 から RQ4 のすべての RQ において、1 万語あたりの頻度を調整頻度として使用する。これらに加え、地域別学習者ごとに、各習熟度の「ADC 全体使用量」及び、「データの総語数－ADC 全体使用量」の粗頻度表に対して、RQ1 同様、カイ二乗検定を実施し、さらに、多重比較として Fisher の正確検定を実施することで、各習熟度間における差の有意性を検証する($\alpha=5\%$)。RQ1 同様、多重比較の際には Bonferroni 法に基づき、 p 値を調整する。

次に、RQ3 では、対数尤度比統計量(log-likelihood ratio:LL)に基づき、アジア圏各地域の学習者(B1_1 と B1_2 を統合したデータ)を母語話者と比較した際、各地域の学習者が特徴的(過剰または過少)に使用する ADC を調査する。本研究では、 $\alpha=5\%$ を満たす、 $LL>3.84$ の副詞を過剰使用語、 $LL<-3.84$ を過少使用語と位置付ける。本来であれば検定を繰り返すため、Bonferroni 法等によって有意水準を調整する必要があるという指摘もあるが、その場合、評価基準が厳しくなることで特徴語の抽出が困難になる可能性がある。そのため、RQ3 では多重比較は実施しない。なお、この調査では AntConc の Keyword List 機能を使用するが、調査対象とする各地域の学習者データには頻度がなく、参照先の母語話者データには頻度がある ADC が存在し

た場合、AntConc の機能上、当該語及びそれらの LL 値は結果画面には表示されない。その場合、調査対象の学習者データと参照先の母語話者のデータを入れ替え、調査対象を母語話者データ、参照先を学習者データとすることで、対象語の LL 値を調査する。しかしこの場合、LL 値の正負(+/-)の符号が逆転しているため、符号を入れ替えることで値を調整する。

最後に RQ4 では、対象 6 地域の学習者(B1_1とB1_2を統合したデータ)及び母語話者を第 1 アイテム、個々の ADC を第 2 アイテムとした頻度表(1 万語頻度による)を作成し、対応分析を実施する。対応分析とは、表中における大量の行列情報を少数次元に圧縮し、散布図上に視覚的に提示することを可能にする多変量解析手法の一つである(石川, 2010, p.245)。なお、対応分析にはフリーの統計分析ソフトである「HAD」を使用する。

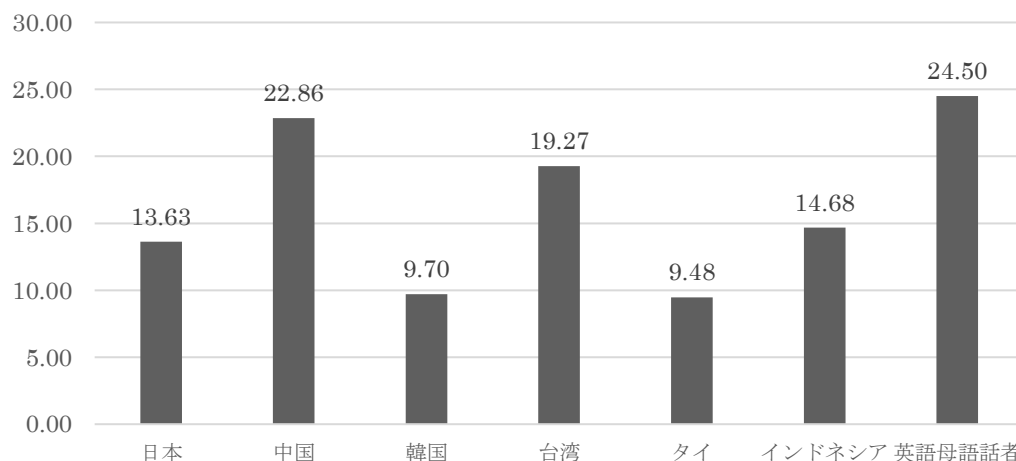
以上の各 RQ で明らかとなった結果に基づき対象 6 地域における ADC 使用実態を計量的に明らかにし、日本人学習者の ADC 使用実態を、国際比較を通じて明らかにすることを試みる。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 地域別学習者(B1)の ADC 全体使用量

アジア圏学習者(B1)と英語母語話者の ADC 全体使用量(1 万語あたり)は下図のようになった。

図 1
地域別学習者(B1)の ADC 全体使用量(1 万語あたり)



上図より、地域間で ADC 全体使用量にはばらつきが見られ、特に使用量の最多い中国人と最も少ないタイ人との間で約 2.4 倍の差が開いていることがわかる。また、上図に基づけば、いずれの地域の学習者の ADC 全体使用量も母語話者の全体使用量を下回っているように思われる。以下、学習者(6 群)と母語話者の計 7 群の間における差の有意性を検証する。下表は、各群における ADC 全体使用量と ADC を除く使用量を粗頻度で提示したものである。下表に基づき、カイ二乗検定と、多重比較として 2 群間で Fisher の正確検定を実施した。

表 6

7 群における ADC 全体使用量と ADC を除く使用量(粗頻度)

学習者・母語話者	ADC 全体使用量	ADC を除く使用量	合計(B1 の総語数)
日本人	139	101842	101981
中国人	371	161953	162324
韓国人	65	66920	66985
台湾人	132	68360	68492
タイ人	120	126478	126598
インドネシア人	113	76869	76982
英語母語話者	222	90391	90613

カイ二乗検定の結果、有意であった($\chi^2=139.213$, $df=6$, $p<.01$, Cramer's $V=0.014$)。Fisher の正確検定を用いた群の多重比較では、日本人と中国人(adjusted $p<.01$)、日本人と母語話者(adjusted $p<.01$)、中国人と韓国人(adjusted $p<.01$)、中国人とタイ人(adjusted $p<.01$)、中国人とインドネシア人(adjusted $p<.01$)、韓国人と台湾人(adjusted $p<.01$)、韓国人と母語話者(adjusted $p<.01$)、台湾人とタイ人(adjusted $p<.01$)、タイ人とインドネシア人(adjusted $p=.0189$)、タイ人と母語話者(adjusted $p<.01$)、インドネシア人と母語話者(adjusted $p<.01$)において有意差が確認された。

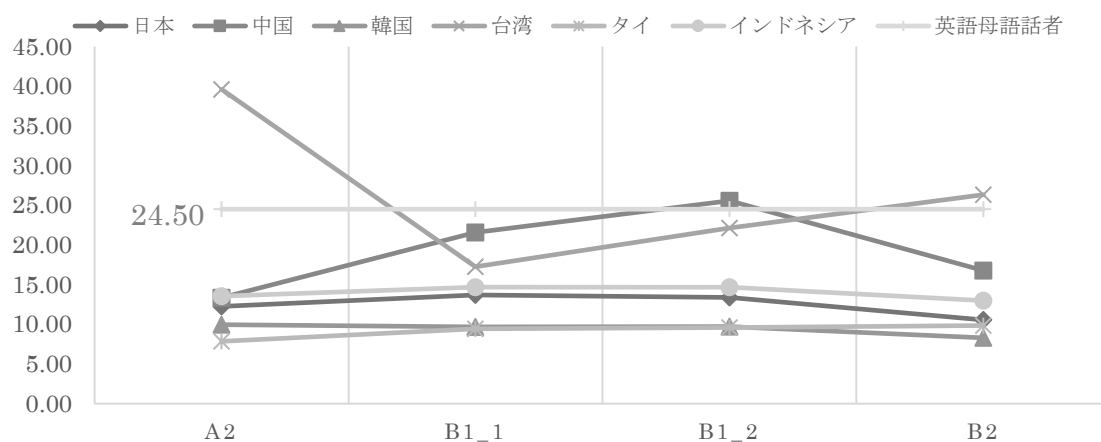
上記より分かることとして、2 点を整理したい。まず、1 点目として、4 地域の学習者(日本・韓国・タイ・インドネシア人)は、いずれも母語話者との間に、ADC 全体使用量に有意差が確認されたことである。この事実から、本研究で対象とした半数以上のアジア圏 EFL 地域において ADC 全体使用量が母語話者よりも不足する傾向にあることが示された。しかしなら、その一方で中国人(adjusted $p=1$, ns)と台湾人(adjusted $p=.6615$, ns)に関しては、いずれも母語話者との間に有意差が確認されず、このことは、必ずしもアジア圏地域の英語学習者において、「学習者<母語話者」とはならないことを意味する。

次に 2 点目として、日本人学習者の ADC 全体使用量は、中国人学習者と母語話者との間には有意差が確認されたものの、他の 4 地域の学習者(韓国・台湾・タイ・インドネシア人)との間に有意差は確認されなかった。そのため、全体使用量に関していえば、日本人学習者は他の地域の学習者と区別される顕著な特徴があるとは必ずしもいえないことが示された。また、日本人学習者の全体使用量(1 万語あたり 13.63)が、6 地域の学習者の平均使用量(14.94)と大きく異なっていないことも踏まえると、日本人学習者の傾向は、日本人固有のものではなく、多くのアジア圏学習者に共通する傾向とみなすべきであろう。

4.2 RQ2 地域別学習者の習熟度別 ADC 全体使用量の変化

続いて、対象 6 地域の学習者に関して、習熟度別に ADC 全体使用量を調査した結果、下図のようになった。比較ができるよう、母語話者の ADC 全体使用量(1 万語あたり 24.50)も図中に示している。

図 2
地域別学習者の習熟度別 ADC 全体使用量の変化(1 万語あたり)



上図を概観すると、中国人と台湾人において、習熟度間で ADC 全体使用量に変化が見られるが、その変化は線形的で安定的なものではなく、また、他の 4 地域(日本・韓国・タイ・インドネシア)の学習者については、いずれの習熟度レベルにおいても母語話者よりも全体使用量が少なく、習熟度間で特徴的な変化が見られない。いずれの地域の学習者も、明示的指導がなければ、全体使用量の適正化を図ることは難しい可能性が高いといえる。以下、地域別学習者の各習熟度間における ADC 全体使用量の差の有意性を検証する。下表は、地域別学習者の ADC 全体使用量及び ADC を除く使用量を、習熟度別に粗頻度で提示したものである。下表に基づき、地域別に、カイ二乗検定及び、各習熟度間の多重比較として Fisher の正確検定を実施した。

表 7
地域別学習者の各習熟度における ADC 全体使用量及び ADC を除く使用量(粗頻度)

学習者	習熟度	ADC 全体使用量	ADC を除く使用量	合計
日本人	A2	84	68445	68529
	B1_1	109	79482	79591
	B1_2	30	22360	22390
	B2+	9	8523	8532
中国人	A2	45	33675	33720
	B1_1	238	110055	110293
	B1_2	133	51898	52031
	B2+	11	6550	6561
韓国人	A2	33	33134	33167
	B1_1	26	26884	26910
	B1_2	39	40036	40075
	B2+	30	36164	36194
台湾人	A2	51	12827	12878
	B1_1	69	39939	40008
	B1_2	63	28421	28484
	B2+	29	10985	11014
タイ人	A2	42	53464	53506
	B1_1	76	80682	80758

インドネシア人	B1_2	44	45796	45840
	B2+	1	1015	1016
	A2	20	14734	14754
	B1_1	55	37410	37465
	B1_2	58	39459	39517
	B2+	2	1539	1541

カイ二乗検定の結果、中国人($\chi^2=15.273$, $df=3$, $p<.01$, Cramer's $V=0.009$)と台湾人($\chi^2=21.918$, $df=3$, $p<.01$, Cramer's $V=0.015$)の 2 地域において有意であったものの、日本人($\chi^2=1.01$, $df=3$, $p=0.798$, ns , Cramer's $V=0.002$), 韓国人($\chi^2=0.65$, $df=3$, $p=0.884$, ns , Cramer's $V=0.002$), タイ人($\chi^2=1.13$, $df=3$, $p=0.769$, ns , Cramer's $V=0.002$), インドネシア人($\chi^2=0.132$, $df=3$, $p=0.987$, ns , Cramer's $V=0.001$)においては有意ではなかった。なお、タイ人及びインドネシア人学習者のデータには、期待値 5 未満のものも含まれるが(両地域とも全体の約 12%が該当)、両地域ともに当該データ数が全体の 20%以下であり、本研究では許容範囲とする。

加えて、Fisher の正確検定を用いた群の多重比較によって、地域別に習熟度間の ADC 全体使用量の有意性を検証した。4 種の習熟度間で計 6 回検定を実施しているが、得られた結果のうち、隣接する習熟度区間(A2とB1_1間, B1_1とB1_2間, B1_2とB2+間の3区間)の有意差に限ると、中国人学習者の場合はA2とB1_1間(adjusted $p=0.014$)で、台湾人学習者の場合もA2とB1_1間(adjusted $p<.01$)で有意差が確認された。また、有意でないと判断された他の4地域(日本・韓国・タイ・インドネシア)の学習者に関しては、群の多重比較において、いずれの習熟度間でも有意差は確認されなかった。

ここで、上記の結果によって示されたことを2点にまとめたい。1点目は、RQ1同様、中国人と台湾人の学習者のみ異なる傾向を示し、両地域ともA2からB1_1にかけてADC全体使用量が有意に変化していた。しかし、それ以降(B1_1とB1_2間, B1_2とB2+間)では、有意な変化は見られず、初級に相当するA2を除けば、中国語を母語とする2地域の学習者は、すでにB1段階から母語話者と同等のADC使用量に達していることになる。これはRQ1における知見を裏付ける結果と言える。

2点目は、日本・韓国・タイ・インドネシア人の英語学習者には、習熟度の上昇に伴うADC全体使用量の特徴的な変化が見られないことである。RQ1の結果を踏まえると、これらの地域の学習者は、習熟度に関係なくADC全体使用量が不足したままの状態である可能性が示された。

なお、A2からB2+にかけて、隣接する習熟度間でADCの使用量が有意に増加しないという日本人学習者の傾向は、中国・台湾を除くアジア圏学習者に共通する傾向であり、他の学習者と区別される特徴的な点はやはり見られない。すでに述べたように、母語話者と比較すると、日本人学習者はADCを十分に使用できておらず、かつ上級になってもその傾向が解消しないことは、日本人固有の問題ではなく、多くのアジア圏学習者に共通して見られる問題と考えられる。

4.3 RQ3 地域別学習者(B1)の特徴的 ADC

まず、強意型 ADC に関して、各地域の学習者を特徴づける過剰・過少使用 ADC を調査した結果、以下の表の通りとなった。なお、表中では該当する ADC の他に、対数尤度比統計量(LL 値)、各地域の学習者頻度(1 万語あたり)、母語話者(ENS)頻度(1 万語あたり)もあわせて示している。

表 8
対象 6 地域(B1)の特徴的な強意型 ADC

地域	過剰使用 ADC				過少使用 ADC			
	ADC	LL	学習者	ENS	ADC	LL	学習者	ENS
日本	surely	15.08	2.746	0.552	definitely	-17.79	0.098	1.766
					clearly	-13.62	0.392	2.207
					undoubtedly	-4.52	0.000	0.331
					truly	-4.28	0.392	1.214
中国	obviously	12.8	2.095	0.441	naturally	-5.75	0.062	0.552
	surely	7.03	1.725	0.552	clearly	-5.09	1.047	2.207
	undoubtedly	4.33	1.047	0.331				
韓国					certainly	-17.84	0.149	2.428
					truly	-12.18	0.000	1.214
					clearly	-9.46	0.448	2.207
					indeed	-7	0.149	1.214
台湾					certainly	-11.48	0.438	2.428
					clearly	-4.54	0.876	2.207
タイ					indeed	-19.23	0.000	1.214
					certainly	-13.97	0.553	2.428
					truly	-10.23	0.158	1.214
					clearly	-10.11	0.632	2.207
					naturally	-8.74	0.000	0.552
					definitely	-8.67	0.474	1.766
					undoubtedly	-5.25	0.000	0.331
インド ネシア					clearly	-11.46	0.390	2.207
					truly	-5.48	0.260	1.214
					definitely	-4.41	0.650	1.766

上表より、明らかになることを 4 点にまとめたい。1 点目は、逸脱的な ADC の総数が、地域によってかなり大きく異なることである。実際、タイ(7 語)＞日本・中国(5 語)＞韓国(4 語)＞インドネシア(3 語)＞台湾(2 語)という関係になり、最小と最大の差は 3 倍を超えている。この背景には、L1 や各地域の外国語教育が影響していると考えられる。

2 点目は、過剰使用語と過少使用語を比較すると、過少使用語のほうが圧倒的に多いことである。6 地域全体を合計すると、過少使用語(22 語)＞過剰使用語(4 語)となる。なお、中国人学習者のみ、過剰使用語(3 語)＞過少使用語(2 語)となっているが、これは 中国人学習者が対象 6 地域内で最も ADC 使用量が多く、母語話者との間に有意な使用量の差が見られなかったことが影響していると思われる。

3 点目は、地域による差が種々見られる一方で、地域の差を超えて共通して過少使用される ADC が存在するということである。clearly(6 地域), truly(4 地域), certainly/definitely(3 地

域)の4語がそれらに該当する。これら4語の定義を *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*(以下, OALD)で確認すると, **clearly** は(1)「見やすく・聞きやすく」, (2)「理解しやすく」, (3)「発話内容が明瞭(obvious)で真実(true)であることを強調する」と説明され, **truly** は(1)「特定の陳述や感情等に偽りがなく(sincere), 真実(real)であることを強調する」, (2)「ある特質を強調する」, (3)「ある特定の説明が正確(accurate or correct)であることを強調する」と説明され, **certainly** は「疑い(doubt)がなく」と説明され, **definitely** は(1)「何かが本当(true)であり, 疑い(doubt)のないことを強調する」, (2)「確かであるように, あるいは, 確かであることを示すように」と説明されている。以上より, これら4語は, 明瞭性・真実性・正確性・確実性等の観点を経由して, 主張内容の妥当性を, 強意的に受け手に提示するADCであるといえる。特に意見文のような, 主張の提示が求められる文脈において, これらの副詞は主張内容を強調する際にふさわしいものであるといえる。しかしながら, 対象地域における多くの英語学習者は, こういった副詞を十分に使用できておらず, 自身の主張内容を適切な形で強調できていない可能性がある。なお, これらのうち **certainly** を除く3語は日本人学習者においても過少使用の傾向が見られ, 日本人の過少使用語には一定の地域的汎用性があることが示された。

最後に4点目は, 過剰使用ADCのうち, **surely** が日中両地域で過剰使用されていることである。OALDでは **surely** が, 「発話内容にほぼ確信を持っていて, 他者に同意してほしいことを示す」と定義されており, その内容に受け手(読み手や聞き手)の存在が目立つ。加えて, Suzuki (2011)は, British National Corpus(BNC)の調査を通じ, **surely** が人称代名詞 **you** と共起しやすく, 対人機能(interpersonal function)を有することを示唆している。これらのことから, 一般的に **surely** は受け手の存在を意識した対人的で直接的な文脈で好まれる副詞であると推測され, 今回使用した ICNALE の Written Essays のデータ中では, 母語話者は受け手に対して自らのスタンスを, 主観的かつ直接的には提示しないために, 結果的に日本人や中国人学習者ほど高頻度には使用しなかった可能性が考えられる。しかしながら, **surely** の過剰使用度が, 日本人において著しく高くなっている背景には(**surely** の LL は日本が 15.08, 中国が 7.03), 日本人が言語使用場面を意識せずにADCを使用し, 特に強意的確信度を提示する手段として **surely** を優先的に使用してしまっている可能性等が考えられるが, これらはあくまでも推測であり, 今後検証が必要である。

続いて, 緩和型ADCに関しても, 各地域の学習者を特徴づける過剰・過少使用ADCを調査した結果, 以下の表の通りとなった。表中では, 対数尤度比統計量(LL値), 各地域の学習者頻度(1万語あたり), 母語話者(ENS)頻度(1万語あたり)をあわせて示している。

表 9
対象6地域(B1)の特徴的な緩和型ADC

地域	過剰使用 ADC				過少使用 ADC			
	ADC	LL	学習者	ENS	ADC	LL	学習者	ENS
日本					probably	-7.19	2.059	4.194
					possibly	-4.28	0.392	1.214

中国	maybe	21.17	6.284	2.318	probably	-17.59	1.417	4.194
					perhaps	-12.84	0.801	2.649
					possibly	-10.7	0.185	1.214
韓国					probably	-25.74	0.448	4.194
					perhaps	-15.89	0.299	2.649
					possibly	-12.18	0.000	1.214
台湾	maybe	34.28	9.052	2.318	perhaps	-16.29	0.292	2.649
					probably	-13.77	1.168	4.194
					possibly	-10.7	0.185	1.214
タイ	maybe	5.26	4.107	2.318	probably	-44.35	0.316	4.194
					perhaps	-20.7	0.395	2.649
					possibly	-4.76	0.395	1.214
インド ネシア	maybe	16.56	6.365	2.318	probably	-26.55	0.520	4.194
					perhaps	-12.78	0.520	2.649

上表より明らかになることを3点にまとめた。1点目は、過剰使用語と過少使用語を比較すると、いずれの地域の学習者も過少使用語の語数の方が多いという点である。6地域全体を合計すると、過少使用語(15語)＞過剰使用語(4語)となっており、6地域の学習者はADC全体使用量の程度に関係なく、緩和型ADCを適切に使用できていない可能性がある。

2点目は、地域の差を超えて共通して過少使用されるADCが存在する点である。probably(6地域)、perhaps(5地域)、possibly(4地域)がそれにあたる。これら3語の定義をOALDで確認すると、probablyには「何か起こりそうな、あるいは事実でありそうなことを述べるために使用される」、possiblyには「何かが存在し、起こり、あるいは事実であるかもしれないことを述べる際に使用される」、perhapsには「possibly」や「概算をする際に使用される」といった記述が見られる。以上から、3語の確信度は必ずしも一致するものではないが、これらの副詞は物事が生じる可能性を考慮にいれ、比較的客観的に緩和的確信度を提示する際に使用されるものであると推測される。また、Biber et al.(1999)は、probablyやperhapsが学術的文脈においても一般的な副詞であることを示唆している(p.868)。以上のことから、3語が、意見の提示が求められる文脈で、緩和的確信度を提示する際、母語話者によって一定頻度で使用されやすい副詞と推測される。しかしながら、学習者は、これらの副詞を使用できず、意見文中で適切な方法で緩和的確信度を表出できていない可能性がある。

3点目は、過剰使用語のうちmaybeが4地域で共通して過剰使用されている点である。OALDにおいて、maybeには、(1)「何かが起こること、本当であること、正しい数であることに確信が持てないときに使用される」、(2)「提案をする際に使用される」、(3)「質問や考えに対して返答する際、特に、同意するのかわからないのか、確信が持てないときに使用される」といった説明がなされている。これらの定義を踏まえるとmaybeは、確信度が非常に低い上に、主張内容に対する話者や書き手の立場が曖昧な副詞と推測され、地域間共通で過少使用傾向の強い、probably、perhaps、possiblyとは異なっている。加えて、Biber et al.(1999)の頻度調査結果では、maybeが会話の文脈で最も頻度が高くなっている(p.869)。以上から、maybeは、書き手の確信度を的確に示すことが求められる意見文のような文脈にふさわしい副詞であるとは必ずしもいえない。しかしながら、一部地域(日本と韓国)を除く対象地域の学習者は、こういった副詞の意味特性を適切に理解して

ならず、結果的に母語話者を上回って **maybe** を過剰に使用する傾向があると考えられる。

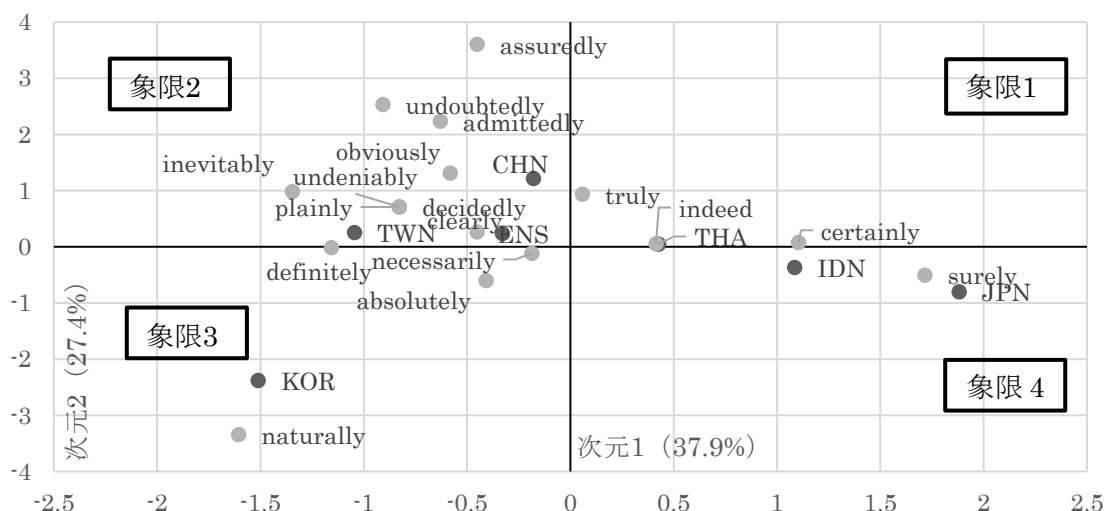
以上の点を踏まえ、日本人学習者の緩和型 ADC 使用を考察すると、(1)**probably** や **possibly** を過少使用という点では、地域的共通性の高い使用傾向を示す一方で、(2)**maybe** の過剰使用や **perhaps** の過少使用は見られず、その点に関しては日本人に特徴的なものとなっている。しかしながら、先行研究で取り上げている藤本(2017)は、同様に対数尤度比統計量に基づき、日本人学習者が **maybe** を多用し、**perhaps** を少用する傾向を指摘しているが、本研究とは異なる結果となっている。その背景には、調査で利用したデータによる違い、具体的には(1)含まれるトピックの種類、(2)データの収集条件等の影響が考えられる。

4.4 RQ4 地域別別学習者(B1)と個別 ADC の相互関係性

RQ4 では、対応分析により、対象 6 地域(B1)の学習者と母語話者、及び個別 ADC 間の相互関係を質的に議論する。

まず、強意型 ADC に関して、以下のような散布図を得た。散布図中には各次元の寄与率もあわせて表記している。

図 3
強意型 ADC に関する散布図



寄与率を見ると、2 つの次元で、元のデータの分散の 60%以上が説明されているので、以下、この散布図に基づいて解釈を進める。

まず、各軸の性質について、次元 1 の左方には **naturally**, **inevitably**, **necessarily** 等の間接的確信度を表出する副詞が、右方には **surely**, **certainly**, **indeed** 等の直接的確信度を表出する副詞が分布している。このことから、次元 1 は「確信度の直接的・間接的表示の程度」に関わる軸であると判断できる。次に、次元 2 の上方には **undoubtedly**, **inevitably**, **clearly** 等の強意性の非常に高い副詞が、下方には **surely** や **naturally** のような上方ほど強意性の高くない副詞が分布している。このことから、次元 2 は「強意性の程度」に関わる軸であると判断できる。

これら 2 種の次元により、散布図の平面は、4 つの象限に区分されることになる。ここでは、散布図の右上を第 1 象限、以下、時計の逆回りに第 2・3・4 象限と称する。各象限には、異なる学習者群と具体的な ADC が分布している。これらを整理したのが以下の表である。なお、第 1 象限と第 4 象限ではすべてのアイテムカテゴリデータが次元 2 の原点近傍(0 付近)に位置していることから、今回はこれらの象限を 1 つの拡張象限とみなす。また、definitely と necessarily に関しても、次元 2 の原点近傍(0 付近)に位置していることから、象限 2・3 の両方に含めている。2 語は散布図上では第 3 象限に該当するため、表中では第 2 象限において 2 語を括弧内に表記している。

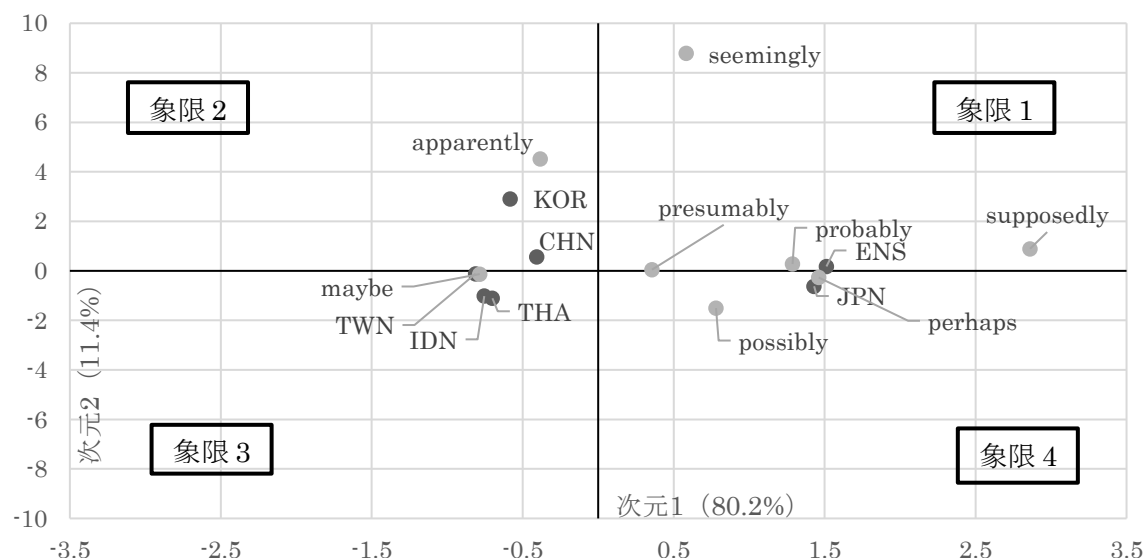
表 10
各象限の特徴(強意型 ADC)

象限	特徴	学習者・母語話者	副詞
1・4	確信度を比較的直接的に提示し、正確性・真実性を主観的に示す。	インドネシア人(IDN) 日本人(JPN) タイ人(THA)	certainly indeed surely truly
2	確信度を認知性・保証性・明瞭性・決定性・不可避性・など別角度から間接的・客観的に示す。	中国人(CHN) 母語話者(ENS) 台湾人(TWN)	admittedly assuredly clearly decidedly (definitely) inevitably (necessarily) obviously plainly undeniably undoubtedly
3	確信度を絶対性・自然性・必然性の観点から間接的・客観的に示す。	韓国人(KOR)	absolutely definitely naturally necessarily

ここで、散布図及び上表に基づき、アジア圏学習者の中での日本人学習者の特徴を概観しておきたい。日本人学習者は、アジア圏学習者と重なる点も多い一方、全体として、(1)確信度を直接的・主観的に表示する強意型 ADC を使用する、(2)別角度から間接的に、かつ強意的に確信度を提示する母語話者や中国人・台湾人学習者とは対照的な強意型 ADC 使用を見せるといった独自の傾向を同時に有していることが示された。強意型 ADC に関して、日本人は直接的で主観的にしか確信度を提示することができず、結果として全体使用量の不足(RQ1)や過少使用語の多さ(RQ3)につながってしまうと推測できる。また、散布図より、日本人学習者は surely と最も近い位置づけとなっており、この結果は RQ3 によって明らかとなった、日本人における surely の過剰使用傾向の独自性をさらに裏付けるものであるといえる。実際、surely の 1 万語あたりの頻度は、「台湾(0.29) < 韓国(0.45) < 母語話者(0.55) < タイ(0.95) < インドネシア(1.17) < 中国(1.72) < 日本(2.75)」と、日本人が最も頻度が高く、母語話者との間に約 5 倍の頻度差が存在する。

次に、緩和型 ADC に関して、以下のような散布図を得た。散布図中には各次元の寄与率もあわせて表記している。

図 4
緩和型 ADC に関する散布図



寄与率を見ると、2 つの次元で、元データの分散の 90%以上を説明していることになる。以下、この散布図に基づいて解釈を進める。

まず、各軸の性質について、次元 1 の左方には maybe や apparently のような安定しない立場から緩和的確信度を示す副詞が、右方には probably, possibly, perhaps のような比較的稳定的な立場から緩和的確信度を示す副詞が分布している。このことから、次元 1 は「書き手の立場の安定性の程度」を示す軸出ると判断できる。次に、次元 2 の上方には seemingly, apparently, probably といった比較的確信度の高い副詞が、下方には perhaps や possibly といった確信度の低い副詞が分布している。このことから、次元 2 は「確信度の高低」に関わる軸であると判断できる。

これら 2 種の次元により、散布図の平面は 4 つの象限に区分される。強意型 ADC 同様、各象限特徴を整理したものが以下の表である。なお、第 1 象限と第 4 象限では多くのアイテムカテゴリデータが次元 2 の原点近傍(0 付近)に位置していることから、これらを 1 つの拡張象限とみなす。また、散布図上の分布に基づき、台湾人学習者(TWN)及び個別副詞の maybe に関しては象限 2・3 の両方に含めている。散布図上は、台湾人学習者も maybe も第 3 象限に含まれるため、表中では、第 2 象限においてこれらを括弧内に表記している。

表 11
各象限の特徴(緩和型 ADC)

象限	特徴	学習者・母語話者	副詞
1・4	比較的安定した立場から、推測・想定・物事が生じる可能性・外見等を通じ客観的に確信度を提示する。	母語話者(ENS) 日本人(JPN)	perhaps possibly presumably probably seemingly supposedly
2	立場が不安定であり、内容に対して、書き手側の曖昧で不明瞭な判断による、主観的な確信度を提示する。	中国人(CHN) 韓国人(KOR) (台湾人(TWN))	apparently (maybe)
3	立場が曖昧で不明瞭なうえに、確信度が低い。	インドネシア人(IDN) タイ人(THA) 台湾人(TWN)	maybe

ここで、散布図及び上表に基づき、アジア圏学習者の中での日本人学習者の特徴を概観しておきたい。日本人学習者は、全体として、(1)比較的安定した立場から客観的に緩和的確信度を示す ADC を使用し、(2)書き手の立場が曖昧な印象を与える ADC を使用する傾向にある他の 5 地域の学習者とは対照的な使用傾向を示し、(3)対象 6 地域の学習者の中では最も母語話者に近い緩和型 ADC 使用実態を示すといった傾向を示すことが明らかとなった。日本人学習者が最も母語話者に近い位置づけとなった要因の一つとしては、RQ3 でも示された通り、多くの対象地域の学習者にみられる、maybe の多用と perhaps の少用の傾向が、日本人学習者にはそれほど強く見られないことが考えられる。実際これら 2 語の 1 万語あたりの頻度は、maybe の場合、「日本(1.57) < 母語話者(2.32) < 韓国(2.84) < タイ(4.11) < 中国(6.28) < インドネシア(6.37) < 台湾(9.05)」の順となり、また、perhaps の場合、「台湾(0.29) < タイ(0.39) < インドネシア(0.52) < 中国(0.80) < 日本(1.86) < 母語話者(2.65)」の順となっており、対象 6 地域の学習者の中で、日本人学習者は maybe の頻度が最も低く、perhaps の頻度が最も高くなっており、日本人が母語話者に近い傾向を示した要因の一つと考えられる。

以上、多変量解析手法の一種である対応分析を実施したことにより、データ中における、日本人学習者の ADC 使用実態を、対象 6 地域の学習者、母語話者、使用される個別 ADC の相互関係性に基づいて総合的に評価することが可能となった。

4.5 総合考察

以上の RQ1 から RQ4 を通じて、日本人学習者の ADC 使用実態をアジア圏の EFL6 地域の学習者における国際比較を通じて考察した。特に日本人学習者に特徴的な ADC 使用傾向として、(1)全体使用量が母語話者よりも有意に少ないこと、(2)習熟度が向上したとしても全体使用量に増加傾向がみられないこと、(3)しかしながら、そのような状況下でも直接的で主観的な確信度を示す surely を過剰使用し、その傾向が対象 6 地域の学習者の中で特に際立っていることが挙げられる。上記で考察した内容はすべて計量的な手法を踏まえてのものであるが、それらが実際の

日本人学習者の英作文例に当てはまる妥当な考察といえるかを確認する。以下は、ICNALE から引用した、習熟度の異なる 2 人の日本人学習者(それぞれ A2 と B1_2)によって書かれた実際の英作文である。

(1) I agree with the statement. I think part-time job is first step to our own future job. Because, we can experience various job. There are service occupation, tutor and remover at time-part job. I think it is important for us to continue the work which we will hope and get in the future till we retire. And, to continue it as long as possible, we have to get an occupation agreeable to my taste. On the other hand, I think that it cannot help giving up the part-time job, if it isn't agreeable to me. But, it is bad to give up it for no reason. I think it is the best to find which field of jobs is the most agreeable to me by having it. So, in the future, we can select work and are likely to make an appeal for the experience at a part time job to the company. Then, we can also study the rule of society. When we spend times in our daily life, we have only chance to speak our friend, family and teacher. But, when we work, we can know many rules. For example, when we speak to our superior and customers, we have to use honorific word and speak politely and not to get angry easily. And, we can acquire useful and good manners. However, some people say college students's main occupation is study. Surely, it is right. If we worked too long to go to school, our achievement would decline and we would make our parents sad. If we became so, it would be too bad. Thus, I think it is the most important to work when we have free time. And, it is the best of us to acquire various skills, manners without lazing about study (W_JPN_PTJ0_114_A2_0).

(2) Today, I want to talk about this topic as the affirmative side. First of all, what is the part-time job for the college students? I think it's the good opportunity to touch our society before we go out the society. From that, they can get the skill, for example, communication with their customer, cooking, or how to teach something to someone and so on. Moreover we can actually feel social situation, and know the significance of earning money. However some people said that students have to work hard and late, and the environment in their workplace sometimes bad, for example smoking, drinking or something like that. So they disagree this topic because the part-time job will be obstacle for students to study. Surely the main thing for the college students is studying in their college days. I admit this point. But I believe it doesn't mean all students have to do is only such thing. After the graduation and going out the society, we need not only knowledge we can get in universities but also other skill. Only knowledge it's not enough. When you work in your company, you must negotiate with your clients, and keep the good relationship with your colleague. Such skill can't get from only universities. If we can get the basis of such skills during universities, we can quickly fit our society when we start working. So to compare advantages and disadvantages, I believe the part-time job is important for college students as the preparation for working actually in our society (W_JPN_PTJ0_316_B1_2).

上記の作文において、日本人学習者はほとんど ADC を使用しておらず、RQ1 及び RQ2 によって示された、ADC 全体使用量の不足傾向と一致する。さらに唯一使用している ADC は直接的確信度を提示する強意型の surely のみであり、この点は RQ3 や RQ4 で示された結果と関連する。次に、母語話者による作文を、同様に ICNALE より引用する。

(3) Smoking should definitely be banned at all the restaurants in Japan. Many of the United States have banned smoking some years ago, and I think that there are probably a few other countries in the world that have already done so as well. This seems like an obvious thing to do because it is simply not acceptable to allow smokers in restaurants to harm other people. When it comes down to it, at the end of the day that's really all that smoking is. It is just hurting yourself, and it is just hurting other people. There are many other ways to gain whatever benefits smokers feel they have such as relaxation or exercise which can induce a similar pleasant state of mind. Also, smoking is detrimental to all the things in the restaurants. The actual building itself can be harmed by the cigarette smoke; for example, the white walls will begin to turn yellow after some time. The fact that this happens to me is quite revolting, and I would assume that other people probably feel the same way, so it would make sense to ban smoking at restaurants because it will make them cleaner and longer lived. This will save money in construction costs and many other ways, so actually, banning smoking at restaurants would be a profitable move (W_ENS_SMK0_067_XX_1).

上記の母語話者の作文では、冒頭において definitely を使用し、主張文に強意型 ADC を使用することで、読み手に対し、主張内容に高い確信度を持っていることをより鮮明に印象付けている。また、確証のもてない推量の文脈では、緩和型 ADC の probably を使用することで、文章全体として確信の度合いを適切に調整している。なお、2 語(definitely と probably)はいずれも、RQ3 において、日本人学習者に過少使用が認められた副詞である。

以上で取り上げた、日本人学習者及び母語話者の作文例は、RQ1 から RQ4 における計量的調査に基づく考察が、一定の妥当性を持つことを示す。

5. まとめ

本研究は、ICNALE の英作文モジュールである Written Essays (V2.4)に基づき、EFL のアジア圏 6 地域(日本・中国・韓国・台湾・タイ・インドネシア)の学習者による ADC 使用実態を、計量的手法を踏まえて調査したものである。ここでは、各 RQ に即して、(a)アジア圏学習者の全般特性、(b)本研究が主たる対象とする日本人学習者の ADC 使用特性をそれぞれまとめておきたい。

まず、RQ1 より、アジア圏学習者全般に関しては、母語話者と比較した際、一部地域(中国・台湾)を除く 4 地域において ADC 全体使用量が不足していることが明らかとなった。日本人学習者においても同様の傾向が見られ、また、全体使用量は中国を除く 5 地域の学習者と使用量に有意な差は見られず、日本人の傾向が対象地域中で一定の共通性を有することが示された。

次に、RQ2 より、アジア圏学習者全般に関しては、中国・台湾の学習者を除く 4 地域の学習者においてあらゆる習熟度間で ADC 全体使用量に特徴的な変化がないことが明らかとなった。日本人学習者の ADC 使用特性に関しても同様の傾向が当てはまり、習熟度の上昇に伴う自然な形で ADC 全体使用量の適正化が困難な可能性が示された。

次に、RQ3 より、アジア圏学習者全般に関しては、(1)地域によって過剰・過少使用語の語数にばらつきがあること、(2)多くの地域で過少使用語が過剰使用語を数で上回ること、(3)強意型

ADC では、多くの地域で, clearly, truly, certainly, definitely 等の明瞭性・真実性・正確性・確実性等の観点から強意的に確信度を提示する副詞が過少使用されること, (4)緩和型 ADC では、多くの地域で probably, possibly, perhaps 等の物事が生じる可能性を考慮しつつ比較的客観的に確信度を提示する副詞が過少使用される一方で、書き手の立場が曖昧で不明瞭なまま確信度を提示する maybe が過剰使用されること等が明らかとなった。一方で、日本人学習者の固有特性としては、(1)強意型 ADC では surely のみに過剰使用が認められ、その傾向が 6 地域の中で最も強いこと、(2)緩和型 ADC では、多くの地域にみられる maybe の過剰使用及び perhaps の過少使用が日本人には見られないことが挙げられるが、これらの点に関しては再度考察が必要である。

最後に、RQ4 では、対応分析を通じ、日本人学習者の ADC 使用特性として、(1)強意型 ADC の場合, surely を含む直接的で主観的な確信度に関わる副詞を使用し、母語話者や中国人・台湾人学習者の様に、間接的・客観的で強意性の強い ADC を使用できないこと、(2)緩和型 ADC の場合、他の 5 地域の学習者ほど、maybe のような立場が曖昧で不明瞭なまま確信度を提示する副詞を使用しない傾向を持つこと等が示された。

以上の調査から得られる教育的示唆として、日本人学習者が一定量の ADC を適切に使用できるようになるためには、英語指導者による明示的な指導が不可欠であること(RQ1・RQ2)、特に、ある特定の ADC 使用に強く依存せず、使用場面や文脈に応じた ADC 選択ができるようになるための指導が必要(RQ3・RQ4)であることが挙げられる。日本人学習者には、習熟度の上昇に伴う自然な ADC 使用の適正化を図ることは難しく、明示的指導のない学習環境下では、ADC を適切に運用できなくなる可能性も考えられる。そのため、英語指導者は、学習者の ADC 運用の実態を量的・質的の両側面から把握した上で、場面や文脈に応じた適切な ADC 使用を促すための教材を、学習者の習得を促すための足場架けとして作成し、指導を行う必要がある。

しかしながら、本研究は試行的なもので、残された課題も多い。課題の中で、特に重要なことは、本調査があくまでも学習者及び母語話者における ADC 全体使用量や、学習者を特徴づける個々の ADC 特性の考察にとどまっており、学習者がどのような文脈や生起位置、共起パターンにおいてそれらを使用しているかに関する詳細な調査がなされていないことである。この点については今後の研究において扱いたい。

引用文献

- Bao, J. (2022). A comparative study on stance adverbs in abstracts of doctoral dissertations by Chinese and Americans: A case study in petroleum engineering. *International Journal of Language and Linguistics*, 10(2), 95-102.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Longman.
- 藤本和子 (2017). 「日本人英語学習者のモダリティ表現の使用について: “certainty” と “doubt” を表す副詞」『英語英文学研究』(創価大学英文学会), 42(1), 93-106.

- Huddleston, R., & Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge University Press.
- 飯島真之 (in press). 「コーパス言語学の手法に基づく英語確信度副詞の抽出とその使用範囲の解明: CORE コーパスの 33 種のレジスター別頻度調査に基づいて」『中部地区英語教育学会紀要』, 52.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (編). (2010). 『言語研究のための統計入門』. くろしお出版.
- 石川慎一郎 (2021). 『ベーシックコーパス言語学 第2版』. ひつじ書房.
- Lea, D., & Bradbery, J. (Eds.) (2020). *Oxford advanced learner's dictionary of current English* (10th Ed.). Oxford University Press.
- Pérez-Paredes, P., & Bueno-Alastuey, M. C. (2019). A corpus-driven analysis of certainty stance adverbs: Obviously, really and actually in spoken native and learner English. *Journal of Pragmatics*, 140, 22-32.
- Sabzevar, A., Haghverdi, H., & Biriya, R. (2019). A corpus-based analysis of epistemic stance adverbs in essays written by native English speakers and Iranian EFL learners. *The Journal of English Language Pedagogy and Practice*, 12(25), 32-52.
- Simon-Vandenberg, A. M., & Aijmer, K. (2007). *The semantic field of modal certainty: A corpus-based study of English adverbs*. Mouton de Gruyter.
- Suzuki, D. (2011). On the pragmatic functions of modal adverbs: A corpus-based study of linguistic variations in present-day English. 『Zephyr』(京都大学大学院英文学研究会), 24, 1-21.
- Tenuta, A. M., Oliveira, A. L. A. M., & Orfanó, B. M. (2015). How Brazilian learners express modality through verbs and adverbs in their writing: A corpus-based study on n-grams. *Documentação de Estudos em Lingüística Teórica e Aplicada*, 31(2), 333-357.

コーパス

ICNALE: The international Corpus Network of Asian Learners of English, Written Essays (V 2.4). <https://language.sakura.ne.jp/icnale/>

コンコーダンス

AntConc (3.5.9). <https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/>

フリー統計ソフトウェア

HAD. <https://norimune.net/had>

js-STAR XR+release 1.5.3 j. <https://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/>

R version 4.2.2. <https://www.r-project.org/>